

## 第2回自閉症児のための水中運動教室分析記録

実施日：平成16年5月1日（土）

対象者人数：11人

スタッフ人数：24人

水温：29.7℃

室温：33℃

### 実施プログラムとその分析

#### 個別分析

- A児：プログラムに対して見通しを持って取り組んでいるように感じられた。
- B児：フラフープの時に、鼻まで水につけることができた。
- C児：母親から離れてプログラムに参加することができていない。
- D児：得意な課題には取り組むが、苦手な課題は取り組まない。
- E児：背浮きに対して恐怖感を持っているから、補助の仕方を確認した。
- F児：リング課題で顔付けをすることができた。
- G児：教室前のビデオ鑑賞のときに、他児とコミュニケーションをとることができていたが、プールでは関わりを持っていなかった。
- H児：暴言が多い。
- I児：平泳ぎの手が反対であることに自ら気づき修正できていた。
- J児：トイレに行く回数が多かった。→プログラムに集中できていない。

#### 全体分析

- ・プールでの防寒対策について。  
寒さを訴える対象者やふるえている対象者がいる。現状での防寒対策（窓を閉める）以上が必要なことを確認した。しかし、具体的な対策は今後の検討が必要である。
- ・教室における安全管理。  
管理室の進入し、電気機器を触る対象者がいる。扉を必ず閉めることとプールから電気機器が見えないように留意することを確認した。

## 第3回自閉症児のための水中運動教室分析記録

実施日：平成16年5月15日（土）

対象者人数：17人

スタッフ人数：24人

水温：30.4℃

室温：34℃

### 実施プログラムとその分析

#### 個別分析

A 児：平泳ぎの手の練習を浮いた状態で行うことができていた。今後は、バタ足をしながらの平泳ぎの手を指導課題とする。

B 児：サーキットの順番が来るまでに時間が長く集中力が切れてしまった。しかし、その後崩れることはなかった。

C 児：お気に入りのスリッパを他児が履いてしまった。それが原因でパニックを起こした。

D 児：母親から離れスタッフと一緒に課題に取り組むことができた。

E 児：指示（声かけ）が無ければ、課題に取り組むことができない。視覚的なアプローチが必要である。

F 児：あるスタッフが欠席していることを認識していた。

G 児：強いキックが打てるようになりました。

#### 全体分析

・トイレ休憩時の混雑について。

プールには、男女とも便器が一つしかないため、休憩時には混雑してしまう。休憩時間を対象者が揃うまで待つことを確認した。

・プール環境における安全管理について。

プールサイドはすべりやすいため、対象者が転倒する恐れがある。対象者が走らないようにスタッフが留意する。

## 第4回自閉症児のための水中運動教室分析記録

実施日：平成16年6月19日（土）

対象者人数：19人

スタッフ人数：20人

水温：30.5℃

室温：34℃

### 実施プログラムとその分析

#### 個別分析

- A 児：準備体操をあまりしていない。スタッフが前に立ち準備体操をするように促す。
- B 児：受付時に出席カードを忘れてしまい泣いていたが、教室は楽しそうに取り組んでいた。
- C 児：普段は自発的な行動があまり見られないが、ボールプールではボールをスタッフに投げるなどの自発的な行動があった。
- D 児：父親と離れ、スタッフと課題に取り組んだり、一人で遊ぶ時間が多かった。
- E 児：とても興奮しており、プールの中からプールサイドへ8回も走り出し、未遂も7回あった。
- F 児：他児のおでこを叩いた。（対象者にとっては友情の証である）
- G 児：他児が久しぶりに来たことに対して喜んでいました。

#### 全体分析

- ・ボールプールの実施方法について。  
現状のプログラムでは、ボールプールは自由遊びであるが、ゲームなどを取り入れると対象者が今以上に興味を示すのではないか？
- ・スタッフの配置について。  
スタッフの参加人数が確保できない時にどのポジションを削るのかを検討した。

## 第5回自閉症児のための水中運動教室分析記録

実施日：平成16年7月17日（土）

対象者人数：18人

スタッフ人数：21人

水温：30.5℃

室温：36℃

### 実施プログラムとその分析

#### 個別分析

A児：背浮きと口まで水に浸けることができた。

B児：遅刻した事を反省していた。

C児：咳をしている他児に対して「大丈夫？」や手助けをしてくれたスタッフに対して「ありがとう」と言えた。

D児：乱暴な言葉使いをしていた。

E児：プールに飛びこみをして入った。危険であるので、しっかり注意する必要がある。

F児：以前に比べ、準備体操をしっかり行えるようになった。

#### 全体分析

・プールの安全管理について。

プールサイドはすべりやすいため、対象者が転倒する恐れがあることを再確認し、対象者が走らないように声かけを徹底すること確認した。

・器具の管理について。

対象者がテレビやビデオなどをイタズラするため、イタズラをしないように徹底することを確認した。

・対象者の人数増加に伴う安全管理について。

暑い季節になり対象者の人数も多くなった。そのため、課題を行うときに泳ぐためのスペースが確保できないことや衝突しそうになる等の問題点を検討した。泳ぐ順番を決めること、衝突を避けるために声かけをすることを再確認した。

## 第6回自閉症児のための水中運動教室分析記録

実施日：平成16年8月7日（土）

対象者人数：17人

スタッフ人数：18人

水温：30.5℃

室温：36℃

### 実施プログラムとその分析

#### 個別分析

A児：課題に対して、一生懸命取り組むことができていた。

B児：サーキットでの滑り台に対して恐怖感を持っており、順番を待つことができない。

C児：テレビにイタズラをしていたが、他児の「やめて」の声でやめることができた。

D児：初めて母親との入水だったため、明るく落ち着いて課題に取り組むことができていた。

E児：駄目と分かっていることをする。→スタッフの注目を浴びようとしているのでは？

F児：更衣室で誰かがいると着替えることができない。→対象者が更衣する前に一人で着替える時間を作る。

#### 全体分析

・準備体操の実施方法について。

5月1日から準備体操に十分スペースを確保するために対象者を互い違いに配置しているが、まだまだ徹底されていない。また、保護者も互い違いに配置しているためにスペースの確保が十分ではない。→今後は、対象者のみを互い違いに配置をすることおよび保護者は対象者の補助のみとしスペースを確保することを確認した。

## 第7回自閉症児のための水中運動教室分析記録

実施日：平成16年8月21日（土）

対象者人数：14人

スタッフ人数：20人

水温：30.5℃

室温：35℃

### 実施プログラムとその分析

#### 個別分析

A 児：久しぶりの教室の参加だったから、課題に対して集中できていなく、持続性も無かった。

B 児：スタッフや他児に対して興味を示すようになった。

C 児：教室の最中に父親に怒られ、その後は元気が無かった。

D 児：自由時間は、サーフボーダーの真似をしてずっと波乗りのように浮いていた。

E 児：顔つけが2回だけだができた。

F 児：次回からグループ別課題をグループからペンギンイルカグループに昇級することを確認した。

G 児：スタッフとは、コミュニケーションをとることができています。今後は、他児とコミュニケーションがとれるようにアプローチしていく。

#### 全体分析

・サーキットにおける安全管理について。

滑り台の上に一度立ってから座る対象者が多い。滑り台は、水により滑りやすいため、転倒の恐れがある。→滑り台を担当するスタッフが声かけを徹底することを確認した。

・受付時の混雑の解消について。

受付時間終了間際は対象者が一斉に来るため、対応するのが難しい。→ロッカーの鍵を更衣する直前に渡すことで対応することを確認した。

## 第8回自閉症児のための水中運動教室分析記録

実施日：平成16年9月4日（土）

対象者人数：17人

スタッフ人数：19人

水温：30.5℃

室温：36℃

### 実施プログラムとその分析

#### 個別分析

A 児：サーキットの滑り台を滑ることができないが、対象者が通っている養護学校では時間をかければ滑れた。このことから、自由時間を使い時間をかけて対応することを確認した。

B 児：クロールの泳力は、確実にアップしている。

C 児：来る途中にヘリコプターが通り、ヘリコプターの音に興奮していたが、プールに入ったら、落ち着いていた。

D 児：サーキットの平均台をスタッフの補助なしでも落ちずに渡ることができた。

#### 全体分析

・保護者の接し方について。

保護者と対象者の距離が近過ぎるため、スタッフとコミュニケーションがとりにくい対象者もいる。→保護者と離れても平気な対象者は、なるべくスタッフと関りを持てるように声かけを行うことを確認した。

・プログラムのメリハリについて。

現在は、説明をプールサイドにあげて行っている。これから、冬季になり防寒対策を考慮するとプールサイドではなくプールの中で説明をした方がよいのではと意見があった。しかしながら、対象者にプログラムのスタートおよびストップを理解させる必要があることから、現行の通りプールサイドに対象者をあげ説明することを確認した。

## 第9回自閉症児のための水中運動教室分析記録

実施日：平成16年9月18日（土）

対象者人数：10人

スタッフ人数：21人

水温：30.7℃

室温：36℃

### 実施プログラムとその分析

#### 個別分析

- A 児：平泳ぎの手の練習を浮いた（スタッフの補助あり）状態でできるようになった。
- B 児：工事の音が気になっていた。以前では崩れていたが、今回はプログラムに参加できていた。
- C 児：ボールプールの時に他児にボールを投げられ、仕返しにボールをぶつけた。
- D 児：父親と一緒に入水すると、課題に取り組むよりも遊びが優先になっている。
- E 児：プールに飛び込みをした。→大変危険であるため注意する。

#### 全体分析

- ・ボールプールにおける安全対策について。  
ボールプールは、ボールで水中やプールの底が見えないため、赤台（水位を調節するための台）の一段の部分と二段の部分の境分からずらぬに危ない。→次回が境にスタッフを配置することによって危険を回避することを確認した。
- ・プール環境の安全対策について。  
赤台（水位を調節するための台）外れやすく危険である。対策として、金具等を使い赤台を固定する案があったが、金具も外れやすく危険性が高まることから、今まで通りに水中および陸上のスタッフが外れをチェックしていくことを確認した。

## 第 10 回自閉症児のための水中運動教室分析記録

実施日：平成 16 年 11 月 6 日（土）

対象者人数：10 人

スタッフ人数：20 人

水温：30.5℃

室温：32℃

### 実施プログラムとその分析

#### 個別分析

A 児：携帯電話に興味を持っており，他児の保護者やスタッフが携帯電話を持っていないかポケットやバックの中を探していた。

B 児：課題に持続して取り組むことが難しい。

C 児：水中ダンスの時にモデルを見ないで上手に踊ることができていました。

D 児：他児がふざけているのを注意した。

E 児：ゴーグルを着けるイコール潜ることと理解されている。

F 児：プールサイドで 2 回おしっこをした。

G 児：サーキットで待つのが嫌で崩れた。

#### 全体分析

・プール環境における防寒対策について。

プールの室温も下がり，教室中に寒さを訴える対象者がいた。現行の防寒対策（窓を閉める）に加え，プールの送風を停止することによって防寒対策になるか否かを次回確かめることを確認した。

・トイレ休憩時間の変更について。

現行のプログラムでは，一時間半ある教室の 1 時間終了時点でトイレ休憩の時間を設けている。しかし，プール環境によってトイレに行く感覚が短くなること（実際に，休憩時間前にトイレに行く対象者が多い）を考慮すると，トイレ休憩の時間を早める必要がある。→プログラムの 45 分終了時点でトイレ休憩を設けることを確認した。

## 第 11 回自閉症児のための水中運動教室分析記録

実施日：平成 16 年 11 月 20 日（土）

対象者人数：10 人

スタッフ人数：20 人

水温：31℃

室温：32℃

### 実施プログラムとその分析

#### 個別分析

A 児：イルカⅡへ昇進することを確認した。

B 児：サーキットの滑り台，平均台を補助なしでできた。

C 児：父親との距離が近過ぎる（対象者が小 6 の女兒であるために）。→スタッフが上手く間に入ることを確認した。

D 児：スタッフの真似を他のスタッフに見せてくれた。

E 児：更衣室でスタッフの補助なしで着替えることができました。

F 児：サーキットの滑り台の上で順番を待つことが難しい。→下で待たせることを確認した。

G 児：顔付けができるようになってから，できる課題が多くなった。対象者や保護者も楽しそうに参加できている。

H 児：課題に対して，持続して取り組めるようになった。

I 児：バタ足をするとき，両足キックになっていた。

#### 全体分析

・グループ別課題の昇進基準について。

現行では，グループ別課題の昇進の基準が曖昧であった。対象者や保護者に目標を持ってもらう意味でも，昇進の基準を明確にする必要がある。→基準をペンギンからイルカⅡの昇進は，顔付けができる，バタ足で 10m 泳げることを基準とした。イルカⅡからイルカⅠは，クロールで 15m 泳げることを昇進基準とした。

## 第 12 回自閉症児のための水中運動教室分析記録

実施日：平成 16 年 12 月 18 日（土）

対象者人数：9 人

スタッフ人数：25 人

水温：30.5℃

室温：31℃

### 実施プログラムとその分析

#### 個別分析

A 児：久しぶりの教室への参加でしたが、スムーズにプログラムに参加できていた。

B 児：行動のエリアが狭く赤台（水位調節するための台）が二段の部分でしか活動をしていない。

C 児：スタッフが話しかけても反応を示さない。

D 児：他児に対して、「危ない」と危険を教えてあげることができた。

E 児：教室中に父親との過ごす時間が長く、スタッフや他児との関わりが希薄である。

F 児：一回飛び込みをして入水した。スタッフと飛び込みをしないと約束をしてからは飛び込みをしなかった。

G 児：ボールプールでの浮き島が大好きで、独占していた。他児が来るのを嫌がっていた。

I 児：スタッフの真似をしていた。

#### 全体分析

##### ・ボールプールでの安全管理について

赤台（水位を調節するための台）の一段と二段に部分の境目にスタッフを配置したことから、危ない場面は無かった。しかし、コースロープを潜ろうとした対象者がいた。→次回からは、コースロープの境にもスタッフを配置することで危険を回避することを確認した。

## 第 13 回自閉症児のための水中運動教室分析記録

実施日：平成 17 年 1 月 15 日（土）

対象者人数：10 人

スタッフ人数：21 人

水温：30.5℃

室温：30℃

### 実施プログラムとその分析

#### 個別分析

A 児：水中ダンスをとっても激しく踊っていた。

B 児：スタッフの指示に対して、良い悪いはさまざまであるが反応を示すようになった。

C 児：平泳ぎの手の練習の声かけを「アンパンマン」アレンジして練習していた。

D 児：プログラムのマイナーチェンジに対して、パニックを起こさず、対応できるようになった。

E 児：「疲れた」と連続して言っていた。→対象者が少ないときは運動量が多過ぎないように注意が必要であることを確認した。

F 児：昇進したグループにも対応できていた。

G 児：クロールの泳力はある。今後は、息継ぎを習得することによって、長い距離が泳げるようにする。

H 児：スタッフとコミュニケーションが取れるようになった。

I 児：対象者の数が少ないこともあり、プログラムの後半は疲れてしまった。

#### 全体分析

・プール環境における防寒対策について。

防寒対策として、プールの送風を停止し、ある程度の効果はあった。しかしながら、まだ寒さを訴える対象者がいる。さらなる、防寒対策が必要であるが、具体的な対策は今後の課題である。

## 第 14 回自閉症児のための水中運動教室分析記録

実施日：平成 17 年 2 月 12 日（土）

対象者人数：6 人

スタッフ人数：18

水温：29.7℃

室温：30℃

### 実施プログラムとその分析

#### 個別分析

A 児：自由遊びの時に、補助なしで滑り台を滑ることができ、サーキットでも滑ることができた。

B 児：普段より落ち着きがなく、参加できないプログラムや持続性がない場面があった。

C 児：以前と比較して、常同行動が減った。

D 児：スタッフと目を合わせることができた。

E 児：他児が泳いでいる姿に拍手していた。

#### 全体分析

・対象者のトイレ利用の仕方について。

プールには、トイレが男女とも一個ずつしかないため、休憩時に混雑してします。特に、女性用トイレは混雑してしまうため、男性用トイレを女児が使えば混雑が解消できるのでは？との意見が出た。しかし、女児が男性用トイレを使用することは社会的におかしい事のため、これまで通り休憩時間を対象者が揃うまで待つことを確認した。

・対象者に対する声掛けの仕方についての確認。

今回のように、対象者の数がスタッフ数を下回っているときに、対象者に対して声かけが多くなってしまう傾向がある。そのため、対象者がパニックを起こしやすい。→そのため、必ずしも対象者に関わることのないスタッフも必要であることを確認した。

## 第 15 回自閉症児のための水中運動教室分析記録

実施日：平成 17 年 2 月 26 日（土）

対象者人数：9 人

スタッフ人数：17 人

水温：30.3℃

室温：30℃

### 実施プログラムとその分析

#### 個別分析

- A 児：課題に対して、持続的に取り組むことができるようになった。
- B 児：準備体操が左右反対になっている。
- C 児：対象者が多いとプログラムに集中して取り組むことができない。
- D 児：スタッフの指導に対して、すぐに修正することができていた。
- E 児：苦手な課題に対して、取り組まない。→得意な課題から不得意な課題へとシフトさせていくことを確認した。
- F 児：指導をするスタッフを変えても、パニックを起こすことなく適応できていた。
- G 児：サーキットのボールに対して、ボールを目で追うなどの反応を示すようになった。
- H 児：以前のように、寒さを訴えなくなった。

#### 全体分析

- ・グループ別課題における練習スペースについて。  
イルカⅡのグループ練習は、1 コース分のスペースで行っている。現在は、4 人がイルカⅡのグループで練習しているためにスペースが狭いとの意見があった。しかしながら、他のグループ練習のスペースの狭いためにイルカⅡだけスペースを広げることは難しいことを確認した。そのため、指導方法を改善することによって危険を回避できることを確認した。

## 第 16 回自閉症児のための水中運動教室分析記録

実施日：平成 17 年 3 月 12 日（土）

対象者人数：8 人

スタッフ人数：22 人

水温：30.5℃

室温：34℃

### 実施プログラムとその分析

#### 個別分析

- A 児：スタッフに対して、「内緒だよ」と言って話をしていました。
- B 児：プログラムの中にやる課題、やらない課題がはっきりしている。→やらない課題に対するアプローチが必要である。
- C 児：着替えにすごく時間がかかった。
- D 児：ヘリコプターが飛んでいたのので、すごく興奮していた。
- E 児：脈拍数のチェックのとき（三回とも）に、保護者が教えた次の数を言っていた。
- F 児：プログラムに慣れてしまい悪ふざけをすることが多い。→課題のマイナーチェンジが必要である。
- G 児：鼻を摘むことなしで、潜ることができた。
- H 児：できる課題は多くなったが、顔付けはできていない。→水に対する恐怖感を取り除く必要がある。
- I 児：他児の行動が気になり、スタッフに「〇〇くんは、トイレに行ったのですか？」と確認した。

#### 全体分析

- ・プール環境での安全管理について。  
現在は、コースを区切るのにコースロープを二本利用している。しかし、コースロープの間に手や頭が入り危ないため、今後はコースロープを一本にすることによって危険を回避することを確認した。

## 第 17 回自閉症児のための水中運動教室分析記録

実施日：平成 17 年 3 月 26 日（土）

対象者人数：11 人

スタッフ人数：21 人

水温：30.2℃

室温：30℃

### 実施プログラムとその分析

#### 個別分析

- A 児：久しぶりの参加であったため、更衣室に入るまでに時間を有したが、プログラムには問題なく参加できていた。
- B 児：水の泡が気になっていた。
- C 児：これまでは、父親との距離が近かったが、今回はスタッフと課題に取り組むことができた。
- D 児：前回の欠席したことをスタッフに「休んでごめんなさい」と謝ることができていた。
- E 児：平泳ぎの手の練習の時に、自ら息継ぎの練習をしていた。
- F 児：着替えの補助スタッフに対して、「恥ずかしいから、こっちは見ないで」と言った。

#### 全体分析

- ・ボールプールの安全確認について。  
ボールプールでもぐっている対象者が勢いよく水中から出てくると、頭が当たり危険である。スタッフは、潜っている対象者に対して注意深く観察しておくことが必要である。
- ・サーキットのマイナーチェンジについて。  
サーキットのボールキャッチの課題を現行のパスから高く上げるパスにすることによって、今までキャッチできる対象者にとってプログラムのマイナーチェンジになるのではとの意見があった。→次回からプログラムとして取り入れることを確認した。

平成 16 年度

水中運動教室のための基礎研究の分析記録

資料

平成 16 年 8 月 27 日 金曜日

平成 16 年 9 月 8 日 水曜日

平成 16 年 12 月 27 日 月曜日

## 水中運動教室のための基礎研究の分析記録

実施日：平成 16 年 8 月 27 日金曜日

参加メンバー：小野寺，西村（正），朱，天岡，藤澤，小野，川岡，西村（一），  
河野，妹尾，岡本，関，西岡，坂川，坂本，崎谷，藤森，宮下，  
大西，深見

### 打ち合わせ事項

- ・水中運動教室のプログラムに関する打ち合わせ.
- ・対象者に対する指導方法についての打ち合わせ.
- ・評価基準についての打ち合わせ.

### 打ち合わせ内容

- ・現行のプログラムに関して変更が必要な点や教室の運営方法について議論した.
- ・対象者の障害程度や能力に応じた指導方法について検討した.
- ・評価基準を説明した. 記録スタッフが具体例を提示し，議論した.

### 対処内容.

- ・夏期であり参加対象者が多いため，後半のグループ別課題の時間を確保するために，自由時間，平泳ぎの手の練習の終了の時間を調節することとした. プログラムは，グループ別課題において参加対象者に合わせリーダーがマイナーチェンジさせることとした.
- ・言葉による指示が入りにくい対象者に対しては，視覚的なアプローチをすること，保護者を介する指導を行っていくことを確認した.
- ・現行の評価基準を再確認した. 評価が難しいときには，その様子を記載しておき，反省会のときに議論することとした.

## 水中運動教室のための基礎研究の分析記録

実施日：平成 16 年 9 月 8 日水曜日

参加メンバー：小野寺，天岡，藤澤，小野，西村（一），岡本，関，西岡

打ち合わせ事項

・第 59 回日本体力医学会大会予演会

「障害児者の社会参加のための水泳教室の開催とスポーツ活動バリアフリーの支援活動に関する研究－平成 15 年度のまとめ－」

小野寺昇，西村一樹，小坂多恵子，天岡寛，白優覧，野瀬由佳，小野くみ子，中西洋平，川岡臣昭，河野寛，妹尾奈月，関和俊，岡本武志，西岡大輔，星島葉子

「精研式 CLAC-2 で評価した自閉症児の水中運動の行動分析」

藤澤智子，西村一樹，小坂多恵子，天岡寛，白優覧，野瀬由佳，小野くみ子，中西洋平，川岡臣昭，河野寛，妹尾奈月，関和俊，岡本武志，西岡大輔，星島葉子，小野寺昇

「足浴ハンドエルゴメーター運動における水温の違いが生体に及ぼす影響」

天岡寛，西村一樹，小野くみ子，岡本武志，関和俊，西岡大輔，西村正広，小野寺昇

## 水中運動教室のための基礎研究の分析記録

実施日：平成16年12月27日月曜日

参加メンバー：小野寺，西村（正），朱，藤澤，小野，川岡，西村（一），河野，妹尾，岡本，関，西岡，坂川，坂本，崎谷，藤森，宮下，大西

### 打ち合わせ事項

- ・水中運動教室の平成16年度第3期の反省および第4期の目標についての打ち合わせ。
- ・水中運動教室第4期のグループおよび個別目標の設定。

### 打ち合わせ内容

- ・水中運動教室の平成16年度第3期の反省および第4期の目標について議論した。
- ・水中運動教室第4期の各グループの目的および個別目標について議論した。

### 対処内容

- ・第3期の目標であった「グループ（個別）活動の設定」について，グループの昇進基準を明確に設定したこと，課題をクリアーできる対象者はグループをあげたなどの意見があった。第4期の目標については，第3期まで行ったグループ活動を発展させていくことを確認した。
- ・各グループの目標をペンギングループ「バタ足の習得によって基礎泳力を養うこと，指導者の指示を理解し，行動する」，イルカグループⅠ「指導者の手本および声かけでクロールの泳力アップする」，イルカⅡ「息継ぎの習得による泳力アップおよび指導者の指示を理解する」，イルカⅢ「バタ足の練習をとして，スタッフとのコミュニケーション能力の向上を図る」とした。また，各対象者について目標を確認した。